

綴る文から生まれる絆

寒川 靖子

蝉の声を聞く時期、それは毎年、そして何十年と変ることなく、その場所がどこであっても、私は必ず思い出す。

初めて日本語を書いた日のことだ。私は四歳だった。太平洋戦争開戦より以前、国民学校就学前であれば四歳は数え歳になる。

七月も暑い午後、築山には蝉が鳴いていた。数本の大松が枝を張る植込みの奥から滝の音がする。蝉の声はふいに止んでしんとしたかと思えば、降るように鳴き出す。

その日、私は「セミ」の文字を書いた。

いつどうしてそうなったか記憶は途切れるが、気がつけば座敷の中央に紫檀の机を前にして母と並んで坐っていた。机の上には一冊のノートと鉛筆が数本、鉛筆はきれいにけずってある。ノートの表紙は親指姫の図柄が可愛い。私は少しうれしくなってそと手に取って開いてみた。紙は真白だった。

母がそこに手を添えていった。

「今日からここへ字を書きましょう。」

見上げる私に頷いた母は小さくほえんだ。

「今日は暑くてずい分と蝉が鳴いているからセミと書いてみましょうか。」

母は鉛筆を一本取ると白い頁の右上に「セ」「ミ」と一文字一文字大きく書いた。片仮名だった。

「セミ。あの鳴いている蝉を文字で書くと、こうなるの。」

力強い母の字を私はじつと見つめた。母がさし出す鉛筆を私は握り締めた。持ち方を直す母の指のぬくもりと、Bのトンボ鉛筆を私は忘れない。

「さあいっしょに書きましょうか。」

私は母に習ってゆつくりと手を動かした。

「鉛筆の持ち方を正しくして、書く順序を間違わずにするとよく書けますからね。」

母の教えはこうして始まった。それは「アイウエオ」からでなく「いろは」でもなく、眼の前のそこにある物の名称を書くことに尽きた。「セミ」の次は「トンボ」「カエル」「イヌ」へ、花の名もあった。片仮名から平仮名へ進み、七歳には画数の少ない漢字を書いたり読んだりした。

産まれ育った村は県境の山脈のふもとにあった。一軒の本屋もない山里だったが、私は本に恵まれた家庭環境にあった。

生家は終戦まで士族であり、父方母方の祖父は共に開業医で、父は訓導の職に就いていた。書庫には禁断の書も含むが、医学書に教育の専門書、種々の全集などが天井まで壁を埋めていた。私はここで『金色夜叉』『不如帰』『自然と人生』『大菩薩峠』を知る。覚えた仮名を駆使して、難しい文字のふり仮名を読む。頭の中は騒がしく知っている限りの文字が入り乱れたが、私は言葉の楽しさに酔った。読む喜びは大きかった。よく解らないがややこしい文字を真似て書いてもみた。

人形遊びやままごとよりも読み書きを好きな私に、母は手紙の書き方を教えてくれた。

国民学校へ入学は近かった。白紙をはがきの大きさに切りそろえると、母はその一枚に手本を書いてみせた。

「お正月には、あけましておめでとうございますとあいさつするでしょう。元日に会えない人にははがきでそれをしましょうね。おめでとうございます。今年もよろしく願います。と書くのね。」

母の字の置き方に習って、私ははがきに字を書いた。どの文字をどのように並べるかを考えた。次は暑中見舞である。暑い夏に体を大事にして下さいと書くはがきだった。文字はしっかりと強く正しく書く。きれいに書くよりも誰にも読める字を書くことが大切だと母は話した。

はがきの最初の実行は、国民学校一年生の夏、担任の教師と校長に暑中見舞を書いた。母の指導は敬語の使い方へ進んだ。目上の人はどう使うか、母の教えは厳しかったが、それを守って文章を書くと、自分でもよりよい文章になると感じた。

「はがきは短い文になるけれど、手紙ならたくさん書けます。顔を知らない遠くの人も話ができます。大きくなって外国の言葉を勉強してドイツやフランスの人と手紙の交換ができればいいわね。それには日本の言葉を勉強しなければね。自分の国の言葉を正しく使えないでははざかしいでしょ。」

母の話に私の胸は弾んだ。人魚姫やマッチ売りの少女の話进行思ひ出すと夢見心地になった。

学校でも国語が最も好きな学科だった。得意な学科でもあったので成績はよかった。

長い戦争が日本の敗戦で終結すると、新教育制度が施行になった。新しい教育制度は戦勝国アメリカの主導によるものだった。私達はそれまで学んで来た日本の歴史や文化に習慣から神仏の在り方まで殆どを否定されることになる。それをよしとする教育は、残しておくべき日本古来の姿まで失ってしまったのではないか。日本の国の品位、礼儀までも変えてしまった年月は、民族の魂さえ見失いかねないのではとの不安を覚える。

新教育制度の中で私達少年少女は戸惑いながらも日本の将来を見つめて勉学に励んだ。

この時代、戦乱の荒廃が残る世にいち早く咲き出た花が少女雑誌の発刊だった。出版社は競い合って少女向けの月刊誌を刊行した。

優れた内容の頁には未来の日本の女性として立派になってほしいと願う社会が、少女達の育成にどんなに努力していたかが伺える。

高名な小説家の作品、秀でた訳者による海外の名作、絵画彫刻など芸術品の紹介、抒情画家のさしえなど、豊かな情操教育の要素があふれていた。

私は東京の出版社の直売部から年間定期購読者として月刊誌の直送を依頼していた。近くに書店のない村なので、母は出版社の目録を取り寄せ、私のほしい書籍を直接送ってもらっていたのである。

その間に、私は愛読者グループを発足させると大勢の文通の友を得ることになった。一時期七十名に余る友との手紙交換は豊かな知識と友情の輪をひろげた。名簿を通して、少女一人一人が住む地の歴史、文化、敗戦後の人々の現状を語り合いどう生きるかを話合う手紙は国の将来の在り方まで書き綴った。

母から聞いた言葉の中に「顔を知らない遠くの友と話ができる手紙は素晴らしい」のひとことを胸に刻む歳月だった。

母が逝って久しく、文通の友も鬼籍に入った人は少なくない。だが健在に便りを寄せる友もいる。私も便りを書き送っている。友は少女だけではない。神の下僕となるを志してローマへ行った少年もある。家族のために幼な妻になった少女も。忘れ難い友である。

世の中の波はいかほど狂うとも  
素直に生きん少女の日をば

これは終戦の年、私が詠んだ一首である。小学校四年生だった。訓導から役所務めになった父が公職を追われ農地改革施行から逆境へ激変の環境にあつて九歳の私はこのときからものを書くことに親しむようになって現在に至る。幼児期から病弱だった体質もあつたせいかもしれない。

人なみに生涯を共にする人とめぐり合い、夫の両親、兄弟と暮らし、義父母を看取り、二人の息子を世に出した。「お母さんには筆を持ち続けてほしい。」という子等に、疲れたと思いつつながら「書くこと」は生きがいになりつつある。

「身体五臓六腑これ父母に受く」というが、私は四十年間に十三回の手術を体験した。生家の両親に申し訳ないが万全とはいえないまでも、今は私なりの健康を保っている。筆を持つ手がある限り機器には頼らず、父母からもらった手で文字を書きたいと願っている。

「パパ」「ママ」が日本語として通用する日本になった。私の疑問は少なくないが、時代と  
思つて人生の仕上げに向おうと思う。

墨で書いた日本語の遺書をめざして。